

## 【誤治をどう考えているのか？】

西洋医学において「誤診」は大きな問題としてとりあげられています。同様に、漢方医療の場でも「誤治」に対する医師の責任は、古くから追究されています。

「何ノ逆ヲ犯スカ（誤治のことですね）ヲ知り、証ニ従ツテ之ヲ治ス」。

つまり、脈候と症候（証候）を丁寧に診察（観察）するなかで、どのような逆治、誤治が病人に対してなされたかをよく考え、病気が進行しているのか、治ろうとしているのか、その証候を見極める必要がある、と述べられています。

「脈浮、数（さく-脈拍数が多いということです）ナルモノハ、当（まさ）ニ汗出デテ癒（い）ユベシ。若シ医、之ヲ下セバ身重シ、心悸ス（胸苦しくなる）。汗ヲ発スベカラズ。」

つまり、汗を発することによって治癒に至る患者さんに対し、便秘があるからといって下剤を与えることは「逆の治療」になるわけで、身体が重く、心悸亢進を来す、と述べています。

「心下悸シ、上衝シ、起テバ則チ頭眩（めまい）シ、小便不利スル苓桂朮甘湯証ニ対シ、汗ヲ発スルトキハ経ヲ動カシ（循環系に異常を与えること）身ハ振々トシテ揺ヲナス。」

つまり、誤治によって少陰病である真武湯（しんぶとう）証になることが述べられています。

医師たるものは「常ニ須（すべから）ク此レヲ識（し）リテ誤ラシムルコト勿ルベキナリ。」と誤治に対する医師の責任が強調されています。つまり、証の判断を誤って間違った薬方を病人に与えた場合、病気が治らないだけでなく、重症化させてしまう、あるいは壊病（えびょう-難治になること）に追いこむことになる、と述べられているわけです。誤治のことは、別名錯治（サクジ）ともいいます。浅田宗伯（あさだそうはく）はこの句を深く心にとどめ、処方集を発行する際に「勿誤薬室、方函口訣」と名づけています。

漢方は様々な症候を目標にお薬が与えられることが多いようですが、たんにめまいがあるとか、頭痛がある、冷え症、胃部不快感といった症候のみによって薬方を与えることは危険なことです。常に患者さん全体をどうとらえるのかという判断のなかで、個々の症候に対する薬方を考える必要があります。西洋医学的病名治療は、漢方治療においては当てはまらないわけです。